

看護師養成学科、管理栄養士養成学科に在籍する 学生の食及び将来の職種連携に対する意識

Analysis of the students majoring in nursing and human nutrition at the faculty of nursing and human nutrition on their consciousness toward dietary habit and their perspective to mutual job-cooperation

松原あつみ^{1) 2)}、人見英里¹⁾

Atsumi Matsubara^{1) 2)} and Eri Hitomi¹⁾

要旨

同一学部の看護師養成学科または管理栄養士養成学科に在籍する3、4年生192名を対象に、食生活の実態と医療における食事・栄養管理に対する考えや態度について、自記式アンケート調査を実施した。アンケート回収率は79.7%であった。結果から、栄養学生は看護学生に比べバランスの良い食事を摂っており、料理する頻度が高く、普段の食事で栄養バランスを意識していた。また、両学科とも3年生より4年生のほうが栄養バランスを意識していた。両学科共に病気の治療における食事・栄養管理や経口摂取の重要性を認識している学生が多かった。病気の治療における食事・栄養管理や経口摂取の重要性については、両学科の学生ともに認識し、互いの職種との連携が重要であると考える一方で、具体的場面を想定すると同職種だけで解決しようとする学生が少なくなかった。今後は、大学において他職種連携に向けた、より実践的な教育が行われることが望ましいと考えられた。

キーワード：看護学生、栄養学生、食生活、職種連携

Abstract

In this study, we surveyed the students majoring in nursing and human nutrition at the faculty of nursing and human nutrition on their consciousness toward dietary habit and their perspective to mutual job-cooperation. We distributed a questionnaire to 192 third- and fourth- year students, 153 (79.7%) of whom answered. The obtained data show: the students of human nutrition major take meals of better-balanced nutrition, cook more frequently and are more aware of the importance of nutritional balance compared to those of nursing major. Among them at both majors, fourth-year students tended to consider nutritional balance more important than the third-year students. Most students recognized the importance of controlling diet or nutrition as well as oral ingestion while treatments are being applied to patients. Regarding this point, many students considered mutual cooperation between their perspective professions crucial, i.e. nurses and administrative dietitians. Some of them, however, showed a tendency to seek for solutions against possible problems without any help or with the help of the same professionals. The self-assessed degree of knowledge of each other's occupation was relatively low, whereas many

1) 山口県立大学看護栄養学部栄養学科

2) 徳島大学大学院栄養生命科学教育部 (現所属)

1) Department of Human Nutrition, Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

2) Institute of Biomedical Sciences, Tokushima University Graduate School

連絡先：hitomi@yamaguchi-pu.ac.jp

of them hoped to learn more about it in the future. This implies that more practical education of inter-professional collaboration is desirable in university education.

Key words : students majoring in nursing, students majoring in human nutrition, dietary habit, job-cooperation

緒言

近年、業務の増大に対応するため、「チーム医療」が様々な医療現場で実践されており、他職種連携は重要度を増してきている¹⁾。管理栄養士が参加しているチーム医療及びカンファレンスは種類も多く、クリニカルパスに栄養食事指導が組み込まれている病院も多いことが報告されている²⁾。管理栄養士が参加する代表的なチーム医療の一つとしてNST (Nutrition Support Team) がある。NSTとは、一人ひとりの患者に対し、チーム医療による適切で質の高い栄養管理を実施することである³⁾。2010年には「栄養サポートチーム加算」が新設され⁴⁾、今後、より一層NST活動は盛んになると考えられる。一方で、医師をはじめとした関連職種間で栄養管理についての知識や認識に差があり、まだ十分に効果的な稼働ができていないことが課題とされている^{5)6)~9)}。このことから、他職種連携は重要であるが、現状では連携は不十分であることが窺える。

管理栄養士が連携すべき職種は医師をはじめとして様々なあるが、より患者に応じた食事・栄養管理を行うためには、患者の食事を直接見て把握しやすい病棟看護師との連携が大変重要であると考えられる。しかし、実際には、栄養士と看護師の連携、看護師の患者の食生活への支援（以下、食支援）や介入は不十分であるという報告がされている¹⁰⁾。

患者に対する食支援については、看護師自身の食生活との関連性に関する過去の報告では、看護師の食生活に問題がある場合、食支援も少ないとされている¹¹⁾。環境や職種として置かれた立場など様々な要因で、看護師の食生活に課題が多いことや、看護師が健康的な食生活をしにくい現状が窺われ¹³⁾、これが、患者への食生活の支援や介入が少ないという現状と関連している可能性がある。また、看護師の予備軍ともいえる看護学科の学生（以下、看護学生）の食生活には、欠食（特に朝食欠食）^{13)~15)}や牛乳、緑黄色野菜、魚類等の食品摂取頻度の低さ¹¹⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、タンパク質の摂取量、脂肪摂取量の低さ、

3大栄養素のバランスの悪さ、カルシウムや鉄分の不足¹⁵⁾など、課題が多いことが指摘されている。このままの状況が続けば、看護師による患者に対する食支援が十分とは言えないという現状が今後も引き継がれていくことが懸念される。また、患者の食事を管理する管理栄養士の予備軍ともいえる栄養学科の学生（以下、栄養学生）の食生活にも課題がある。他専攻の学生よりも良い食生活である¹⁶⁾といわれている一方で、看護学生と同様に朝食欠食や鉄分やカルシウム不足といった問題点を抱えていることが指摘されている^{17)~22)}。

前述のように、看護学生と栄養学生それぞれの食生活についての調査は多くあるものの、両者の食生活について同一の調査を行い、比較した研究はほとんどない。本学は、栄養学科と看護学科が同じ学部に設置されており、両者を比較しやすい環境にある。そこで、本研究では両学科の学生の食生活について調査し、それぞれの学科に所属する学生の食生活の改善には何が必要なのかを検討するとともに、将来、看護師と管理栄養士になる両学科の学生の医療における食事・栄養管理に対する考えや態度についても比較検討した。

方法

1. 対象者

同一学部に所属する看護師養成学科の3年生51名、4年生52名、及び管理栄養士養成学科の3年生42名、4年生47名の計192名を対象とした。

2. 調査期間

平成26年10月中旬～11月上旬にかけて行った。

3. 調査方法および内容

対象者が履修している講義終了時を利用して無記名自記式調査用紙を配布し、回収ボックスにて回収を行った。調査内容としては、以下について調査を実施した。

- 1) 回答者自身に関する設問 (学科・学年・居住状況)
- 2) 看護学生・栄養学生の食生活の実態

朝食の摂取状況、昼食の摂取状況、夕食の摂取状況、食事パターン、食品の摂取頻度、間食の摂取状況、外食の利用頻度、料理する頻度、栄養バランスの意識、現在の食生活への満足度

3) 看護学生・栄養学生の患者の食事・互いの職種に対する意識

患者の食事に対する意識（病院における食事管理・栄養療法の病気の治療における重要度、栄養投与経路の選択、他職種との協働）、互いの職種への理解度、興味・関心

なお、質問紙の設問内容は看護学生、栄養学生ともに同一としたが、3) においてのみ、看護学生に対しては患者の食事に関する質問・相談への対応を、栄養学生に対しては患者の病気の治療に関する質問・相談への対応を問う設問を設けた。

4. 用語の定義

本論文における用語の定義は以下の通りとした。

- a. 欠食…食事を全くとらない場合だけでなく、砂糖・ミルクを加えないお茶類（日本茶・コーヒー・紅茶など）、水及び錠剤・カプセル・顆粒状のビタミン・ミネラルのみをとった場合。
- b. 主食…ご飯（おにぎり）、パン、麺類（かけうどんなど、麺以外の具材がほほない場合はこちらに含める）。
- c. 主菜…肉料理、魚料理、大豆を使った料理、卵料理など。
- d. 副菜…野菜がメインになる料理（野菜炒め、お浸し、サラダ、煮物など）。
- e. 単品料理…カレーライス、丼もの（親子丼など）、具入りうどん、ミートソーススパゲッティ、ドリアなど。
- f. 間食…エネルギー源となる食べ物、飲み物。したがって、砂糖・ミルクを加えないお茶類（日本茶・コーヒー・紅茶など）、水及び錠剤・カプセル・顆粒状のビタミン・ミネラルのみをとることは間食に含まない。
- g. 外食…学生食堂や飲食店で食事をするだけでなく、出前をとったり（宅配ピザ等）、コンビニやスーパー、大学売店等でお弁当やパン、惣菜を買って食べたりする場合も含める。
- h. 料理…調理器具を使用して食事を作ることを指す。例として、「野菜を包丁で切ってサラダを作る」「鍋を使用してインスタントラーメンを作る」等も料理に含む。

- i. 栄養バランスを意識する…例えば、不足しがちな野菜の摂取量を増やしたり、油の多い食物を控えたり、主食・副菜・主菜のバランスに気をつけることを指す。

5. 集計及び統計処理

エクセルアンケート「太閤」（エスミ）を用い、単純集計およびクロス集計を行った。 χ^2 検定及び残差分析についてはSSRIエクセル統計2012（株式会社社会情報サービス）を用いて、コレスポネンズ分析については、SPSS Statistics ver.17.0を用いて行った。

6. 倫理的配慮

本研究は、本学の生命倫理委員会の承認（承認番号：26-45号）を受けた後、実施した。調査対象者には、研究目的、調査協力は任意であること、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、個人情報保護等について質問紙に記載するとともに、実施前に口頭で説明した。質問紙への回答をもって本研究に同意を得たものとした。

結果

1. アンケートの回収結果および回答者の属性

アンケートは192部配布し、看護師養成学科の学生（以下、看護学生）82名、管理栄養士養成学科の学生（以下、栄養学生）71名、計153名から回答を得た（回収率79.7%）。各学科の学年ごとの内訳については、看護学生では3年生56.1%（46名）、4年生43.9%（36名）、栄養学生では3年生42.3%（30名）、4年生57.7%（41名）であった。居住環境については、両学科とも80%以上が1人暮らしをしていた。

2. 看護学生・栄養学生の食生活の実態

1) 朝食、昼食、夕食の摂取状況

朝食、昼食、夕食の摂取状況を図1に示した。

朝食の摂取状況について、栄養学生では「ほとんど毎日食べる」62.0%（44名）、「週4～5日食べる」19.7%（14名）、「週2～3日食べる」8.5%（6名）、「ほとんど食べない」9.9%（7名）であった。また、看護学生では「ほとんど毎日食べる」57.3%（47名）、「週4～5日食べる」12.2%（10名）、「週2～3日食べる」12.2%（10名）、「ほとんど食べない」18.3%（15名）であった。 χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差はみられなかった。

朝食の欠食理由については、両学科ともに、「時

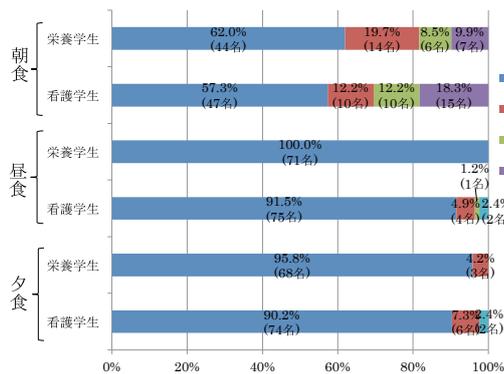


図1 朝食、昼食、夕食の摂取状況

間がないから」朝食を欠食すると回答した学生が最も多くみられた。栄養学生では「食欲がないから」15.4% (4名)、「時間がないから」61.5% (16名)、「面倒だから」7.7% (2名)、「以前から食べる習慣がないから」3.8% (1名)、「その他」11.5% (3名)となった。看護学生では、「食欲がないから」18.2% (6名)、「時間がないから」45.5% (15名)、「面倒だから」9.1% (3名)、「以前から食べる習慣がないから」9.1% (3名)、「その他」18.2% (6名)となった。

昼食の摂取状況について、栄養学生では、「ほとんど毎日食べる」が100.0% (71名)であった。また、看護学生の昼食の摂取状況については、「ほとんど毎日食べる」92.7% (76名)、「週4~5日食べる」1.2% (1名)、「週2~3日食べる」1.2% (1名)、「無回答」1.2% (1名)であった。看護学生の昼食の欠食理由については、「食欲がないから」40.0% (2名)、「時間がないから」40.0% (2名)、「食費を節約したいから」20.0% (1名)となった。

夕食の摂取状況について、栄養学生では「ほとんど毎日食べる」95.8% (68名)、「週4~5日食べる」4.2% (3名)であった。看護学生では「ほとんど毎日食べる」90.2% (74名)、「週4~5日食べる」7.3% (6名)、「無回答」2.4% (2名)であった。両学科の学生ともに、夕食を欠食する者は少ないものの、看護学生の方が欠食の割合は高いことが推察された。

夕食の欠食理由について、栄養学生では「太りたくないから」25.0% (1名)、「時間がないから」50.0% (2名)、「その他」25.0% (1名)であった。看護学生では「食欲がないから」33.3% (2名)、「時間がないから」16.7% (1名)、「面倒だから」16.7% (1名)、「その他」2名33.3% (2名)であっ

朝食の摂取状況と普段の夕食の開始時刻

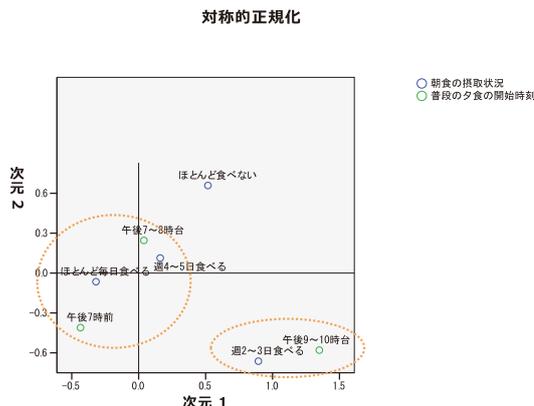


図2 朝食の摂取状況と普段の夕食の開始時刻

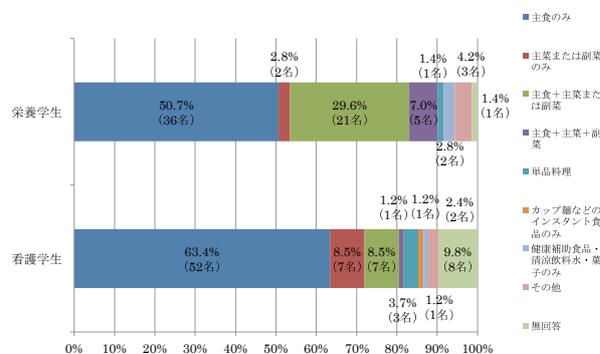


図3 食事パターン(朝食)

た。

普段(平日)の夕食の開始時刻について、栄養学生では「午後7時前」19.7% (14名)、「午後7~8時台」67.6% (48名)、「午後9~10時台」12.7% (9名)であった。看護学生では、「午後7時前」34.1% (28名)、「午後7~8時台」59.8% (49名)、「午後9~10時台」4.9% (4名)、「無回答」1.2% (1名)であった。以上3項目について χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間に有意差はみられなかった。

朝食の摂取状況と普段の夕食の開始時刻について、コレスポネンシ分析を行った結果、夕食の開始時刻が早い者は朝食の摂取状況が良く、夕食の開始時刻が遅い者は朝食の摂取状況が良くないことが推察された(図2)。

2) 食事パターン

図3に示すように、両学科ともに朝食には「主食のみ」を食べる学生が多かった。「主食+主菜または副菜」及び「主食+主菜+副菜」(以下、バランスの良い食事)とその他の項目を合わせたもの(以下、単品)について χ^2 検定を行った結果、両学科

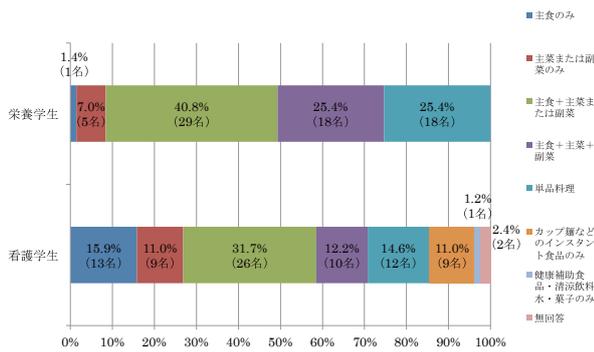


図4 食事パターン(昼食)

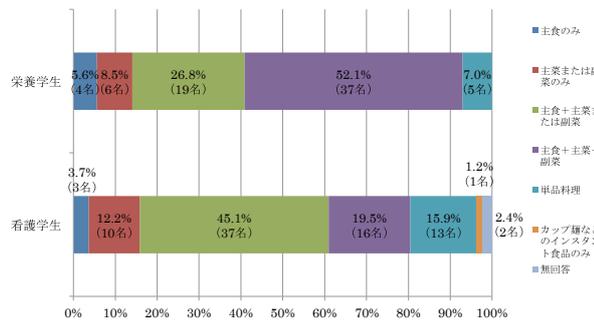


図5 食事パターン(夕食)

の学生の間には有意差がみられた (P=0.0002)。栄養学生は単品のみの食事ではなく、バランスの良い食事を摂る者が多かった。

図4に示すように、昼食には「主食+主菜または副菜」を食べる学生が多かった。バランスの良い食事と単品について χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差がみられた (p=0.009)。朝食同様、栄養学生はバランスの良い食事を摂る者が多かった。

夕食によく食べる食事パターンについては、図5に示すように、栄養学生では「主食+主菜+副菜」が最も多く、看護学生では「主食+主菜または副菜」が最も多かった。バランスの良い食事と単品について χ^2 検定を行った結果、危険率5%未満で両学科の学生の間には有意差はみられなかったもの (p=0.08)、「主食+主菜+副菜」を食べる栄養学生は、看護学生の約2.7倍で、栄養学生の方がよりバランスの良い食事を摂っている傾向が見られた。

3) 食品の摂取頻度

食品の摂取頻度については、「ほとんど毎日食べる」「2日に1回食べる」と回答した者(高頻度群)と「1週間に1~2回食べる」「ほとんど食べない」と回答した者(低頻度群)に分け、 χ^2 検定を行った結果を表1に示した。穀類、イモ類、魚介

表1 食品の摂取頻度

		ほとんど毎日食べる 2日に1回程度食べる	1週間に1~2回食べる ほとんど食べない	χ^2 検定
穀類	看護学生	53	27	P=0.72
	栄養学生	56	15	
イモ類	看護学生	13	69	P=0.53
	栄養学生	14	57	
果物	看護学生	10	72	P=0.002**
	栄養学生	23	48	
肉類	看護学生	59	23	P=0.04*
	栄養学生	60	10	
魚介類	看護学生	15	77	P=0.29
	栄養学生	16	54	
卵	看護学生	49	33	P=0.19
	栄養学生	49	21	
大豆、大豆製品	看護学科	27	55	P=0.07
	栄養学科	33	37	
牛乳、乳製品	看護学科	27	55	P=0.07
	栄養学科	33	37	
油脂類	看護学科	61	21	P=0.69
	栄養学科	54	16	
野菜類	看護学科	62	20	P=0.0006**
	栄養学科	67	3	

**P<0.01, *P<0.05

類、卵、大豆・大豆製品、牛乳・乳製品、油脂類には学科間で有意差は見られなかった。ただし、大豆・大豆製品の摂取頻度について、「ほとんど毎日食べる」「2日に1回食べる」「1週間に1~2回食べる」「ほとんど食べない」の4項目で χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差がみられた (p=0.0089)。さらに、残差分析を行った結果、「ほとんど食べない」では危険率1%未満で、「2日に1回程度食べる」では危険率5%未満で有意差がみられた。よって、栄養学生のほうが、看護学生より大豆・大豆製品をよく食べる者が多く、ほとんど食べない人は少なかった。果物、肉類、野菜類については、栄養学生のほうが看護学生より有意に高頻度群が多かった。また、果物の摂取頻度について、「ほとんど毎日食べる」「2日に1回食べる」「1週間に1~2回食べる」「ほとんど食べない」の4項目で検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差がみられた (p=0.0054)。さらに、残差分析を行った結果、「ほとんど毎日食べる」と「ほとんど食べない」では危険率1%未満で有意差がみられた。よって、栄養学生のほうが、看護学生より果物をよく食べる者が多く、ほとんど食べない人は少なかった。

4) 料理する頻度

頻度については、図6に示すように、栄養学生では「ほぼ毎日」料理する者が最も多く、看護学生では、「週に4~5日程度」料理する者が最も多かった。 χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差がみられた (p=0.04)。さらに、残差分析を行った結果、「ほぼ毎日」に危険率1%未満、「週2~3日程度」に危険率5%未満で有意差がみられ

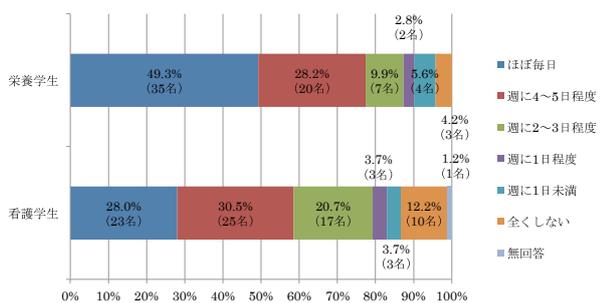


図6 料理する頻度

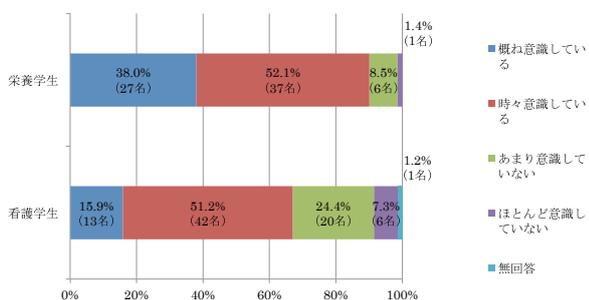


図7 栄養バランスの意識

た。栄養学生のほうが、ほぼ毎日料理をする者が多かった。

5) 栄養バランスの意識

栄養バランスの意識についての両学科学生の結果は、図7に示した。学科別に意識の程度について、 χ^2 検定を行った結果、両学科の学生間に有意差がみられた ($p=0.004$)。さらに、残差分析を行った結果、「概ね意識している」、「あまり意識していない」では学科間に危険率1%未満で有意差がみられた。「ほとんど意識していない」では有意差は見られなかったが、看護学生の方が多いことが推察できた。よって、栄養学科のほうが普段の食事で栄養バランスを意識している学生が多いことが明らかになった。

学年別にみると、3年生栄養バランスの意識については、「概ね意識している」21.1% (16名)、「時々意識している」47.4% (36名)、「あまり意識していない」22.4% (17名)、「ほとんど意識していない」7.9% (6名)、「無回答」1.3% (1名)であった。また、4年生の栄養バランスの意識については、「概ね意識している」32.5% (25名)、「時々意識している」54.5% (42名)、「あまり意識していない」11.7% (9名)、「ほとんど意識していない」1.3% (1名)であった。「概ね意識している」「時々意識してい

る」と回答した者 (意識している者) と、「あまり意識していない」「ほとんど意識していない」と回答した者 (意識していない者) について χ^2 検定を行った結果、3年生と4年生の間に有意差が見られ ($p=0.0082$)、3年生より4年生の方が栄養バランスを意識している者が多かった。

3. 看護学生・栄養学生の食に対する意識

1) 患者の食事に対する意識 (病院における食事管理・栄養療法の病気の治療における重要度、栄養投与経路の選択、他職種との協働)

病気の治療における食事管理・栄養療法の重要度に対する意識について、栄養学生では「大変重要である」88.7% (63名)、「まあ重要である」9.9% (7名)、「あまり重要ではない」1.4% (1名)であった。看護学生では「大変重要である」90.2% (74名)、「まあ重要である」7.3% (6名)、「どちらともいえない」1.2% (1名)、「無回答」1.2% (1名)であった。 χ^2 検定を行った結果、両学科の学生間に有意差はみられなかった。両学科の学生ともに、病気の治療における食事管理・栄養療法は重要であると考えている学生が多かった。

また、栄養投与経路の選択については、栄養学生では「経口摂取のみで対応し、その中でできるだけ栄養を補給する」12.7% (9名)、「経口摂取と経腸栄養を組み合わせる十分な栄養を補給する」85.9% (61名)、「経腸栄養と経静脈栄養で十分な栄養を補給する」1.4% (1名)であった。看護学生では「経口摂取のみで対応し、その中でできるだけ栄養を補給する」31.7% (26名)、「経口摂取と経腸栄養を組み合わせる十分な栄養を補給する」65.9% (54名)、「経静脈栄養のみで十分な栄養を補給する」1.2% (1名)、「無回答」1.2% (1名)であった。両学科の学生ともに、経口摂取が可能な場合は、経口から栄養を投与するようにしたほうがよいと考えている学生が多かった。さらに、「経口摂取のみで対応し、その中でできるだけ栄養を補給する」と「経口摂取と経腸栄養を組み合わせる十分な栄養を補給する」について χ^2 検定を行った結果、両学科の学生間に有意差がみられた ($p=0.0045$)。看護学生のほうが、経口摂取のみでは十分な栄養補給が難しい場合でも、経口摂取のみで対応すると考える者が多かった。

図8に示すように、看護学生の患者の食事に関す

る質問・相談への対応については、自分の力または同職種間で解決しようとする学生が約40%であり、管理栄養士に相談すること以外を選択した者が約半数いた。

図9に示すように、栄養学生の患者の病気の治療に関する質問・相談への対応については自分で対応しようとする者が最も多く、次いで、医師に相談する者が多かった。

看護学生の病院における管理栄養士との連携に対する意識については、「とても重要である」85.4% (70名)、「まあ重要である」13.4% (11名)、「無回答」1.2% (1名)であった。また、栄養学生の病院における看護師との連携に対する意識については、「とても重要である」91.5% (65名)、「まあ重要である」8.5% (6名)であった。両学科の学生とも、互いの職種との連携は重要であると考えていた。

(2) 互いの職種への理解度、興味・関心

図10に示すように、両学科の学生共に、互いの職種の病院における仕事について説明できないものが約半数を占めた。 χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差はみられなかった。

学年別にみると、3年生の互いの職種への理解度については、「詳しく説明できる」1.3% (1名)、「おおよそ説明できる」35.5% (27名)、「説明は

できないが、そのような職種があることは知っている」51.3% (39名)、「あまり知らない」6.6% (5名)、「無回答」5.3% (4名)であった。4年生の互いの職種への理解度については、「おおよそ説明できる」63.6% (49名)、「説明はできないが、そのような職種があることは知っている」29.9% (23名)、「あまり知らない」5.2% (4名)、「全く知らない」1.3% (1名)であった。「詳しく説明できる」「おおよそ説明できる」と回答した者(説明できる者)、「説明はできないが、そのような職種があることは知っている」と回答した者(知っている者)、「あまり知らない」「全く知らない」と回答した者(知らない者)について χ^2 検定を行った結果、3年生と4年生の間に有意差が見られた($p=0.0078$)。さらに、残差分析を行った結果、危険率1%未満で、説明できるものと知っている者それぞれについて学年間で有意差が見られ、3年生より4年生の方が説明できる者が多く、3年生は、説明はできないが知っている者が多かった。

栄養学生が看護師についてこれから知ろうと思うかについては、「とてもそう思う」38.0% (27名)、「まあそう思う」52.1% (37名)、「あまり思わない」5.6% (4名)、「無回答」4.2% (3名)であった。また、看護学生が管理栄養士についてこれから知ろうと思うかについては、「とてもそう思う」17.1% (14名)、「まあそう思う」76.8% (63名)、「あまり思わない」4.9% (4名)、「無回答」1.2% (1名)であった。両学科の学生ともに、多くの者が互いの職種について知ろうと思っているが、「とてもそう思う」「まあそう思う」について両学科で χ^2 検定を行った結果、両学科の学生の間には有意差がみられた($p=0.004$)。栄養学生のほうがより強く思っている者が多かった。

「あまり思わない」者の理由は、「働く上で必要

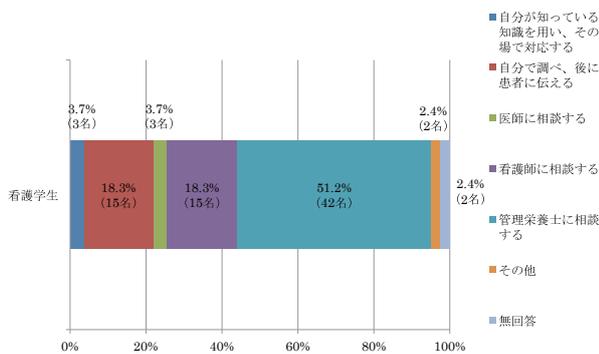


図8 患者の食事に関する質問・相談への対応

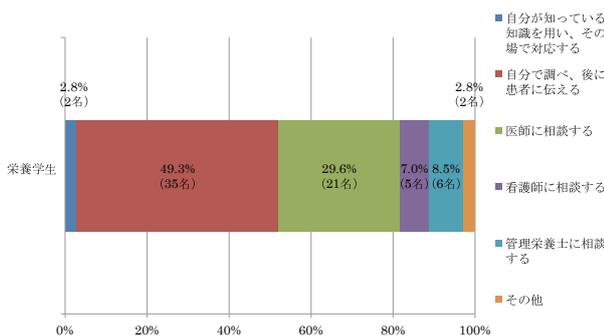


図9 患者の病気の治療に関する質問・相談に対する対応

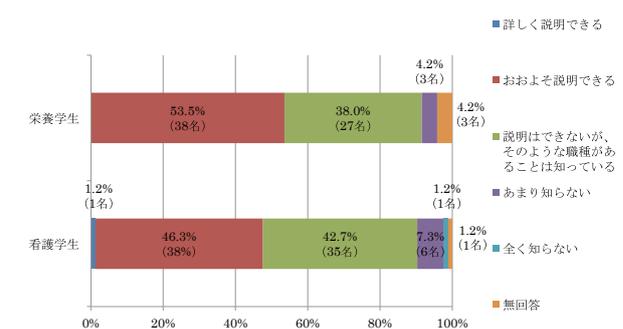


図10 互いの職種への理解度

だと思うから」12.5%（1名）、「専門的なことは専門職に任せた方が良いと思うから」50.0%（4名）、「特に必要性を感じないから」25.0%（2名）、「無回答」12.5%（1名）であった。「まあそう思う」者の理由は、「働く上で必要だと思うから」89.0%（89名）、「その職種に興味があるから」6.0%（6名）、「専門的なことは専門職に任せた方が良いと思うから」4.0%（4名）、「無回答」1.0%（1名）であった。「とてもそう思う」者の理由は、「働く上で必要だと思うから」80.5%（33名）、「その職種に興味があるから」2.4%（1名）、「専門的なことは専門職に任せた方が良いと思うから」4.9%（2名）、「無回答」12.2%（5名）であった。あまり互いの職種に興味・関心がない者には、専門的なことは専門職に任せたほうが良いと考える者や、特に必要性を感じないと考える者が多いことが推察される。互いの職種に興味・関心がある者は、相手の職種に関する理解が働く上で必要だと考える者が多かった。

考察

今回の食生活の実態に関する調査は、平成21年2月27日～3月3日に内閣府が全国の大学生1223人を対象に実施した調査（株式会社クロス・マーケティングの登録モニターに対するインターネット調査）²³⁾を参考に設問を設定した。そのため、同じ内容を問う設問に関しては、今回の対象者と全国の大学生（以下、一般の大学生とする）について比較した。

朝食の摂取状況について、先行研究^{14)~16)}では、他専攻の大学生に比べ、栄養学生の朝食欠食率が低いことや、看護学生の朝食の欠食率が高い傾向にあるといわれている。今回の調査では朝食の摂取状況について両学科の学生間で有意差はなかったものの、同様の結果が得られた。

普段（平日）の夕食の開始時刻は、栄養学生、看護学生共に午後9時までに食べる者が一般の大学生より多いことが推察された。調査対象の大学周辺には深夜まで営業している飲食店が少ないという立地条件も結果に影響を与えた可能性があり、教育だけによる影響とは言い切れない。この点について明らかにするためには、今後さらに詳しく調査をする必要があると考えられる。さらに、夕食の開始時刻が遅いほうが朝食の欠食頻度が高いことが推察されたが、内閣府の調査²³⁾でも同様のことが報告されている。

食事頻度自体に学科間で差は見られなかったが、食事内容に目を向けると、朝食と昼食については、栄養学生のほうがバランスの良い食事を摂っていることが明らかとなった。栄養学生が、調理実習などを通して、より実践的にバランスの良い食事について学んでいることが影響していると考えられる。また、看護学生がキャンパスの立地から食堂を利用しにくい環境にあることや、昼食時になると、看護棟で弁当やパンやインスタント食品の販売を行っていることは、今回の結果に多少なりとも影響したと考えられる。看護学生の朝食と昼食の食事バランスが悪いことや、食事を主食のみで済ませる者が多いという報告は過去にもあり²⁴⁾、今回の調査からも、同様のことが推察された。しかし、この報告と異なり、本調査では、昼食に関しては、主食に主菜または副菜を加えて食べる看護学生が最も多かった。本調査の対象者は、同一学部へ属しており、栄養学科の教員や学生と交流する機会が多いことが、この結果に何らかの影響を与えている可能性がある。夕食の食事内容は学科による差はなく、また、両学科の学生共に、他の食事よりバランスの良い食事を摂ると考えられる。学生にとって、夕食は最も食事の準備に時間をかけやすいからではないかと考えられる。

食物摂取頻度については、果物類、肉類、大豆・大豆製品、野菜類に学科間で有意差が見られた。いずれの食品についても、栄養学生のほうが頻繁に食べることが窺える。これらのことから、食事内容については栄養学生のほうが充実していると考えられる。先行研究でも、看護学生は果物、緑黄色野菜、魚類、卵、牛乳、豆類の摂取量が低いことが指摘されている¹⁴⁾¹⁵⁾。しかし、今回は摂取頻度を簡易的に調査しただけであり、摂取頻度が高いからと言って調査対象者が必要量を摂取できていたかは定かではない。今後、さらなる調査が必要である。

本調査から、栄養学生のほうが、看護学生よりも料理する頻度が高いことが明らかとなった。また、栄養学生、看護学生共に一般の大学生²³⁾より料理をする者が多いことが推察された。前述したように、教育の影響と共に、調査対象の大学周辺には飲食店が少ないことが、少なからず影響しているのではないかと考えられる。また、看護学生より栄養学生、3年生より4年生のほうが、普段の食事で栄養バランスを意識していた。このことから、栄養バランスの意識に与える教育の影響は大きいと考えられ

る。また、両学科の学生共に一般の大学生²³⁾に比べ、栄養バランスを意識する者が多い傾向にあった。先行研究でも、栄養学生は普段から他学部の学生より、食や栄養に関して関心を持っていることが報告されている²⁵⁾²⁶⁾。看護学生についても、栄養学に対して高い関心を持つとされている¹⁵⁾。また、今回対象となった看護学生は、全員が2年次に栄養学に関する必修科目（講義）を、3年次に一部の学生が選択科目である臨床栄養学に関する科目（講義）を受けている。よって、一般の大学生²³⁾に比べ、栄養に関する知識があり、栄養バランスを意識する傾向がみられたと考えられる。

有意差が見られない項目がありながらも、栄養学生のほうがより栄養バランスを意識した望ましい食生活を送っていると考えられる。よって、食に関する「知識」や「技術」を身に付けることが、少なからず食生活の改善と関連していると考えられる。しかし、栄養学生の食生活も望ましいものと言い切れないことから、食生活を改善するためには、知識や技術を身に付けた上で、実際に習得したことを自分の生活の中で活用できるようにするための環境づくりなどの支援が必要だと考えられる。

本調査より、栄養学生だけでなく、看護学生においても、病気の治療における食事管理・栄養療法は重要であると考えている者が多く、病院における栄養部門の重要性を認識していると考えられる。これは、先行研究でも明らかにされている¹⁰⁾。経口摂取の重要性を認識している者も多かったが、今回は、経口摂取のみでは十分な栄養補給が難しい場合の栄養投与経路を選択してもらった。その結果、看護学生のほうが、経口摂取のみでは患者が低栄養状態になる可能性がある。看護学生に対しても、基本的な食事・栄養療法について適切な認識を持てるような教育が必要であると考えられる。

両学科の学生共に、互いの職種との連携は重要であると考えていた。しかし、患者から食事に関する質問・相談をされた場合、管理栄養士に相談すると選んだ看護学生は約半数で、自分で対処する者、看護師に相談する者が各々約20%と、自分たちの職種だけで解決しようとする者が少なくないことが示唆された。医療現場で働いている看護師も、看護師間の情報交換より看護師と栄養士間での情報交換が少なくないと感じているとされている¹⁰⁾。栄養学生も、

自分だけで物事を解決しようとする者が多いことが示唆された。両学科の学生共に、他職種と連携することが重要であることは認識していても、具体的場面を想定した場合には、それが行動として現れるまでには至っていない。病院実習に行き、実際に連携が重要だと感じる場面があったことから、連携の重要性を認識したという報告²⁷⁾もあることから、具体的な経験がないと、実際の行動にはつながらないのではないかと考える。

互いの職種に対する理解度については、あまり高くないと考えられる。3年生より4年生の理解度のほうが高いため、教育による影響はみられたが、4年生の時点で理解度が低い者が少なくない現状は無視できない。これから先、他職種連携が必要とされることを考えると、互いの職種について理解を深める必要があると考える。

理解度は高くなかったが、これから互いの職種について知っていこうと思っている者は両学科の学生共に多かった。これらの学生には、他職種と連携をするためには、まず他職種について知る必要があると考えている者が多かった。中には、専門的なことは専門職に任せたいほうが良いと考えたり、特に必要性を感じないために、互いの職種に興味を持たない者もいたが、少数であった。

先行研究では、看護師の栄養管理に対する知識不足を問題として挙げ、看護師が栄養学を学ぶ必要性について述べるもの¹⁰⁾¹³⁾²⁸⁾²⁹⁾が多い。しかし、看護師は、あらゆる領域に対して幅広い知識を要求され、日常業務も多忙である¹⁰⁾。確かに、看護師が栄養に関する知識を身に付けることは有意義だといえる。しかし、看護師の朝食欠食率の高さ¹³⁾や野菜等の摂取頻度が低いこと¹¹⁾¹³⁾、栄養の知識が不足していること¹⁰⁾は以前から報告されていたことであり、看護師に栄養の知識を身に付けるべきだという結論だけでは、不十分ではないかと考える。本研究では、栄養学生も自分たちのみで問題を解決しようとする傾向が見られた。それぞれの職種が、互いの領域について基本的な知識を身に付けることも確かに重要であるが、一つの職種が患者の支援に必要な知識・技能をすべて備え、全てを補う必要はないと考える。一つの職種で補える範囲は限られており、職種を越えた協働、連携にもっと目を向けていくべきではないかと考える。ここで述べるまでもなく、他職種協働の動きは出てきてはいるが、未だ栄養管理に関す

るチーム医療は思うように進んでいない現状がうかがえる³⁰⁾³¹⁾。大学生のうちに実習を通して他職種連携やチーム医療について学ぶことの効果が報告がされている³²⁾。調査対象の大学では、1年次と4年次にヒューマンケアに関して学科を超えて学び合う授業があるが、実際の医療現場での実習を通して、他職種連携について学ぶ機会はない。今後は、他職種連携に関して、各大学におけるより実践的な教育が行われることが望ましいと考える。

謝辞

今回のアンケート調査にご協力くださいました看護学生、栄養学生の皆様、統計解析のご指導を下さいました山口県立大学看護栄養学部栄養学科 増成直美先生、山口県立大学共通教育機構 甲原定房先生に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省医政局チーム医療推進方策検討ワーキンググループ（チーム医療推進会議）：チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集（2011年6月）、<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001ehf7-att/2r9852000001ehgo.pdf>（2014年12月16日）
- 2) 山田雅子・細山田康恵・布施望・瀬戸美江・澤田崇子・石井國男：病院の臨床栄養部門業務の実態調査—管理栄養士養成施設における臨床栄養分野教育への活用—, 栄養学雑誌, 70 (6), 38-47, 2012.
- 3) 伊藤彰博・東口高志：日本におけるNST制度の動向, 栄養学雑誌, 64 (4), 213-220, 2006.
- 4) 東口高志: 栄養サポートチーム加算新設に至った経緯とその意味するもの. 静脈経腸栄養, 25 (6), 1167-1170, 2010.
- 5) 鈴木祥恵・川上祐子・豊田加奈子・久本晃子・足立美穂子：NST（Nutrition Support Team）の効果と質についての検討, 中国学園紀要, 7, 45-54, 2008.
- 6) 鷺澤尚宏：Bacterial translocationの対策（2）NSTの役割, 日外会誌, 108 (4), 211-214, 2007.
- 7) 小園幸輝：NST（Nutrition Support Team）における薬剤師の役割, ファルマシア, 42 (9), 913-916, 2006.
- 8) 豊田暢彦・野坂仁愛・若月俊郎・竹林正孝・鎌迫陽・谷田理：外科病棟におけるチーム医療の実践—NSTを中心に—, 日本外科学会雑誌, 107（臨時増刊号2）, 480, 2006.
- 9) 光吉明・伊藤孝司・小濱和貴・新藏信彦：急性期病院でのNST活動の立ち上げ—医師は抵抗勢力か—, 日本消化器外科学会雑誌, 40 (7), 301, 2007.
- 10) 長谷川忍・田村奈美・中村潤一郎 他：低栄養患者に対する看護師の意識と介入行動の実際, 静脈経腸栄養, 23 (1), 51-58, 2008.
- 11) 尾岸恵三子・足立己幸：患者の食生活援助への看護婦の意識と看護婦の食生活との関係, 日本看護科学会誌, 10 (1), 8-23, 1990.
- 12) 合田友美：新卒看護師の自己管理に対する自己効力感と食生活の実態調査—主な調理者の違いに着目して—, 香川母性衛生学会誌, 11 (1), 27-32, 2011.
- 13) 大重育美：夜勤をする看護職の食習慣と生活習慣の実態調査, 日本医療マネジメント学会誌, 11 (2), 134-137, 2010.
- 14) 高橋清美・吉村恵・岡崎明子・岡村純：看護大学生の食生活に対する認識とその課題, 日本赤十字九州国際看護大学IRR, 8, 23-30, 2010.
- 15) 合田友美：看護学生の食生活に関する研究の動向と課題, 香川母性衛生学会誌, 13 (1), 43-50, 2013.
- 16) 上田志摩子：食生活と健康に関する研究 第2報—女子短大生の食生活状況及び健康状態について—, 帯大谷短期大学紀要, 38, 87-100, 2000.
- 17) 小田良子・内田初代・矢田部直美：女子短大生の食意識と食生活に関する一考察, 名古屋文理短期大学紀要, 25, 59-63, 2000.
- 18) 坂口淳子・小林修平：生涯にわたる健康づくりを志向した、管理栄養士養成課程の学生の食物摂取状況の実態と評価, 和洋女子大学紀要家政系編, 43, 157-164, 2003.
- 19) 目黒美紀・高橋伸子：栄養士を目指す女子大生の食生活の実態, 仙台白百合女子大学紀要, 5, 157-170, 2001.
- 20) 女子短大生（栄養士専攻）の栄養補助食品（サプリメント）利用と栄養・食物摂取状況について, 名古屋文理短期大学紀要, 28, 31-37, 2004.
- 21) 稲葉佳代子・政二千鶴：栄養士志望学生の食

- 生活の実態と課題, 小田原女子短期大学研究紀要, 38, 29-37, 2008.
- 22) 福司山エツ子・木戸めぐみ: 栄養士を目指す女子学生の食行動について—居住形態別による比較—, 鹿児島女子短期大学紀要, 41, 29-47, 2006.
- 23) 内閣府食育推進室: 大学生の食に関する実態・意識調査報告書(平成21年9月), <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/research/pdf/syoku-report.pdf> (2014年12月12日)
- 24) 原ひろみ・中井芙美子・八島美菜子・成順月・岡平美佐子・香川治子・林君江・小林浩美: 看護系大学生の食生活に関する実態について—学生生活実態調査 報告I—, 看護学統合研究(広島文意亜学園大学看護学部紀要), 13 (2), 42-49, 2012.
- 25) 望月美由紀・森山明美・佐久間夕美子・原田彩菜・佐藤千史: 栄養系女子大学生の食生活に関する意識と行動, 臨床栄養, 123 (1), 医歯薬出版, 103-109, 2013.
- 26) 稲葉祐・加藤真理: 女子大生の健康意識と食生活—管理栄養士専攻と食物科学専攻の比較—, 実践女子大学生生活科学部紀要, 50, 151-155, 2013.
- 27) 長澤利枝・馬場志乃・前野真由美: 臨地実習における看護学生の「他職種との連携」に関する学習の実態(第2報), 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 18, 51-60, 2004.
- 28) 川染節江・合田友美: 看護系大学生に対する栄養学教育に関する一考察, 香川県立保健医療大学紀要, 4, 31-36, 2013.
- 29) 安井美和・三厨純子・北川明子 他: NSTスタッフとしての看護師の役割, 静脈経腸栄養, 19 (2), 13-18, 2004.
- 30) 森嶋友一・豊田康義・桑原良秀 他: 栄養サポートチームの活動成績, 問題点及び普及に向けての課題, 医療, 61 (5), 337-341, 2007.
- 31) 佐原稚基・辻毅・坂本浩一・香川幸子 他: Nutrition Support Teamの成果と今後の展望, 和歌山医学, 57 (1), 2-6, 2007.
- 32) 瀧断子・長谷川真澄・荃津智子 他: 学士課程教育における看護師・管理栄養士のチーム医療連携教育プログラムの施行—NST臨床実習をとおして—, 天使大学紀要, 13 (2), 13-25, 2013.